

くの応挙寺見学、居組港までのハイク、夜は友人と香住公園まで歩いて行ったものです。

学部では、昆虫学の岩田久二雄先生の部屋でお世話になり、東京から来られた奥谷助教授の県営住宅に押しかけ、ご迷惑をかけました。岩田先生は昨年他界され、残念でした。入学後、3年経って農科大学らしくなり、先生方は、京大・北大・台北帝大などの出身者が多く外国の話や、講義の合い間によく聞きました。日曜には、見学・採集会が企画され、何度か参加しました。裏の盃山・多紀アルプス連山・瑠璃溪など、いつも森・岩田・浜田・樋口(篠山農高)の諸先生は、ご一緒のことが多かったようでした。70歳に近い高齢の森先生の元気に、学生の私達も励まされました。サンショウウオの説明には造詣の深さにふれ、学問の面白さを肌で感じたものです。

私は1953年卒業しましたが、公務員試験に合格するくらいしか就職は困難な時代でした。幸い農大教養の生物第二(植物)の助手に籍を置かせて頂き、浜田秀男教授の指導を受け、2年半研究室で過ごしました。教養の時代は中庭のバラック?建ての研究室でしたが、旧兵舎を改造して教養生物も新しい部屋に移っていました。南側に教授室と教授研究室、中廊下の北側に実験室の配置でした。生物第一(動物)・第二(植物)は隣りで、植物教室には堀江助教授、辻英夫助手と私、動物教室に、野草俊作助教授、宮田澄男助手、河合雅雄助手が居られ、よく雑談に行ったものです。河合さんがニホンザルを連れて来て、幸島の話面白く聞かしてもらったものです。

夏になると、また、香住の臨海実習、今度は仕事でついて行きました。早朝魚市場へ森先生のお供をし、珍しい魚があると標本ビンにホルマリン漬けにして持ち帰りました。森先生の嬉しそうな童顔が今も眼に浮かびます。

当時県財政も逼迫し、給与の遅配、昇給延伸などもあり大変でした。国立移管、教養廃止問題も噂にのぼり、私は1955年秋、大阪の高校教諭に転進し、以後37年間大阪北摂で生活し、5年前退職を機会に生れ故郷垂水に戻って現在に至ります。森先生も播州生れ。垂水も神戸市ですが、播磨の東端です。余生を兵庫の自然に親しみたいと願っております。(みき まさひと)

神戸生物クラブの誕生

春名 利雄

昭和31年頃、「神戸生物クラブ」が誕生した。それより前、昭和12年頃には神戸の大丸百貨店に「神戸生物同好会」というのがあった。私はその頃御影師範学校の5年生で、この会の会員であった。時々この会の催しに参加したが、市立西宮高等学校の山鳥吉五郎先生などがお

話しして下さったように覚えている。

「神戸生物同好会」は、神戸の大丸百貨店が会員を集めてやっていた会であった。昭和31年頃になって、近畿の各地で夏期水練学校中に事故があった。大丸百貨店では商売上にこのような事故があってはならないと考え、「生物同好会」を学校の先生方の行事にしたいと考え、兵庫県生物学会の神戸支部の先生方に申し出てきた。昭和31年頃のことをもう少し詳しく言うと、学校の団体行事として行った伊勢での水練学校に事故死が発生した。引き続き、関西の学校でも事故死が出るなどしたため、兵庫県生物学会に対して「生物同好会」の将来を引き受けてほしいと依頼があった。その当時、神戸市立二宮小中学校の校長、古川博二先生は、理科研修部の部長であったため、大丸百貨店からの申し出を受けて、「神戸生物クラブ」が発足した。それに伴って事務などが私のところへ来て、会の名前を決めたり、使用するマークを従来のテントウムシから今のアゲハチョウにした。これは私の創案である。

理科研修部の先生方の中には、児童を20~50人も引率して、この会に参加する方もおり、一時は一回の採集会に3,000人の児童らが出席したこともある。道路脇、お寺の庭、水道トイレなどが著しく使用されて、苦情があったこともあった。反面、児童の観察や標本は充実して、立派な作品が生まれるようになった。

「神戸生物クラブ」の会員は、徐々に小学生、中学生にしばられてきた。事故防止の策として父兄同伴が言われるようになり、これが会則になってきた。会員の児童生徒とその父母・父兄といっても大半が母親で、これらが一団となって歩くと、子供はそのかたまりから遠のいて動くようになりがちで、採集用具を持った母親たちが熱心に活動しているかのように見えだしてきた。それに子供の成長に伴って兄姉が辞めて弟妹が引き続いて会員となるため母親は繰り返して出席していくうちに実力をつけてくるようになり、講師をとりまく会員の多くが母親たちのかたまりとなってきた。

(はるな としお:常任理事)

紅谷先生のこと

春名 利雄

ツメタガイを持った女の子に出会った。平成7年6月25日、「神戸生物クラブ」的形観察会でのことであった。この子は私の側に来て手のひらを開いた。これ、ツメタガイ。大きさは5ミリにもみたない小さな貝だ。私は手にとってこの貝を眺めた。なるほどツメタガイである。丁寧に貝を返すとよく見つけたねと言った。小学1年生だ。弟が2歳、妹が1歳。弟はここへ着いた時、体程も

あるリックを背負っていた。重たいとしんどいとも言わないで、あどけない顔をして下ろしていたのが印象的である。

かんかん照りの太陽のもとで400人位が集まったのだろうか。海藻、貝、海浜植物を手に観察がなされた。少しまばらになってきた砂原で、先の女の子と弟が何か探している。どうしたのと近づいて尋ねると、ツメタガイがなくなったと言う。手助けのしようもなく、惜しいことしたなあと探すすべもないことを言い聞かせた。私はふと、自分の若い時の事を思い出した。50年前、この女の子のように幼稚であったが、これはと思つて手にした獲物を無くした悔しさが、腹に残ったことも幾つかあった。

御影師範学校に入学して、博物学を紅谷先生から教わった。その頃、東京から牧野富太郎先生が神戸へ時々来られていた。ある日、紅谷先生に引率されて摩耶山の植物採集会に行った。牧野先生の指導を受けた。ヤマジノホトトギスを手に、直接話し合った時の先生の笑顔を思い出す。その後も時々神戸に来られて、ハナショウブの話、秋の七草の話の講演会などで先生に接した。ある日、新聞で六甲山にクマザサ（ミヤコザサ）の花が咲いたという牧野先生の記事を見て清水君と六甲山へ向かった。住吉川を上った。長い長い道だった。目ざすクマザサの花は見つからないし、随分疲れてとうとう清水君は引き返してしまつた。私もあきらめた。住吉駅から列車に乗って自宅のある鷹取駅で降りる筈だが、ふと気がつくとき動き出した車窓の様子が違う。「あかし」という駅名板がみえた。寝ていたのだ。それにしても長い居眠りだ。見慣れぬ風景の中を列車は速く走る。飛行機から人が飛び降りた。後でわかつたことだが女の子の人がパラシュートで落下したのだそうだ。ようやくついた駅は大久保駅だった。駅員に事情を話して引き返した。

紅谷先生は引き続き細かく指導して下さる。ある日私の植物標本を鑑定して下さい。その時は先生が標本台紙に直接鉛筆で書いて下さい。その1枚にインモケツウと言うのがあった。その草は根元にたまがあって白い花が咲いていて葉は小さな葉面の縁に腺毛が生えていて毛の先は球になって粘液を出している、全体が20センチ程の草だ。その頃の私は未熟でこれを植物図鑑で確認する手段を取らなかった。頭にインモケツウがこびりついた。これがイシモチソウであるとわかつたのは大分後のことであつた。人に教えるときに文字を書いても、言葉で言つても間違いがあるものだなあとつくづく思った。それが紅谷先生であつたとは、いまだに忘れられないことのひとつである。

師範学校の3年になつたとき、私は陸上競技部で走り回っていた。オリンピックで金メダルをとつた三段跳びの南部忠平のコーチを受けて益々走り回つた。しかしそ

れがもとで乾性肋膜炎という酷い病氣なつて一年間療養した。当時は肋膜炎になつたものは再起不能と級友たちは噂した。私はその時から山歩きをして身体を鍛えようと志した。兵庫県博物学会の会員になつたのもこの頃のことだ。昭和8年か9年頃の事であつたろう。5年生の春びっくり仰天のことに会つた。徴兵検査の時の事である。私は甲種合格になつた。予想もしない事であつた。身体に自信ができた。このときから活気のある人生が始まつた。（はるな としお：常任理事）

槌賀安平先生

清水 淳

兵庫県立三原高等学校に槌賀研究室という一室がある。この部屋には、名物先生であつた槌賀安平（つちがや すへい）先生の生物教育に関する資料と、先生が採集された蘚苔類・貝類などの標本が保管されている。先生は、すぐれた生物学者であり、偉大な教育者であつた。

研究室の壁にかかかつてある博物学の3か条「勉メテ自ラ研究セヨ、精密ニ観察実験セヨ、正確ニ思考セヨ」の言葉は、明治42年（1909年）に広島高等師範学校博物科を卒業され、姫路中学で青年教師として教壇に立たれた時から一貫して主張されてきた先生の生物教育の哲学である。先生は、独特の槌賀式教授法でこれを実践され、「専門なきは退化す」といわれ、何事かに精通すればおのずから一般教養が生きてくると教えられた。教育の場は、奈良県・三重県へと移られたが、この間教えを受けた者の中に知名の士は多数である。

昭和25年（1950年）に故郷の淡路島に帰郷され、63歳になられた安平（あんべい）先生は、その後県立三原高等学校で16年間生物教育に携われ、槌賀式教授法は変ることなくますます磨きがかかり、片道5キロの道を毎日休むことなく歩き通され、生徒や沿道の人達から「おじいちゃん」、「安平（あんべい）先生」、「胴乱先生」の愛称で呼ばれる名物先生であつた。その間昭和30年（1955年）には教え子達によって槌賀研究室が建設され、退職後もこの研究室で生物の研究を続けられたのである。

生物学での業績も豊富で、大正3年（1915年）宇治山田中学に勤められていた頃、魚類学に専念され、志摩のシラウオの研究で、当時の魚類学の権威であつたスタンフォード大学のジョーダン博士の招きを受けた。その間に、大病丹毒熱に犯され、希望がみだされなかつたのが惜しまれる。しかし、その後先生は一生教育の道を歩まれる事になり、教えを受けた者達にとっては、このことは幸なことであつたというべきであらう。三重県在任時代には、三重の地質、三重の蘚苔類の分類と分布について研究された。淡路へ帰郷後は、淡路の貝類の分類と